研究

学童保育指導員が認識した入所時の 児童虐待被害児童と親の行動の特徴

鈴木江三子¹⁾, 斎藤 雅子¹⁾, 飯尾 祐加¹⁾
中山 芳一²⁾, 大橋 一友³⁾

〔論文要旨〕

本研究は、岡山県と兵庫県の専任常勤指導員（以下、指導員）のうち、過去1年間に児童虐待の被害児童に関わった経験を有し、本研究協力に同意した22人を対象に児童虐待に関する聞き取り調査を実施し、学童保育における児童虐待の早期発見徴候を明らかにした。その結果、指導員は、被害児童が学童保育（主に10歳未満の児童を受け入れて指導員が保育する制度）に入所した当初から、被害児童の（1）心身の行動特徴、（2）身体の清潔、（3）身体の状態、（4）食事のとり方、（5）衣類の状態、について他の入所児童とは違うことを認識していた。また、加害者である親の言動も、他の親とは違う（1）暴力、（2）暴言・恫喝、（3）未熟な親性、という特徴を認識していた。

入所時の子どもや親の行動を観察することが、児童虐待を早期発見するために重要であることが明らかになった。

Key words : 学童保育, 指導員, 児童虐待, 早期発見, 被害児童

I. 緒 言

著者らは2009~2011年度にかけて、岡山県内の学童保育指導員を対象に児童虐待発見の実態調査と、児童虐待徴候に関する指導員の認識調査を実施した^{1,2)}。その結果、児童虐待を疑い、発見した経験のある指導員は669人中157人（23.2%）であり、そのほとんどが専任常勤指導員（以下、指導員）であった。また、発見した指導員の多くは、子どもの不自然な行動を認識しても、それが児童虐待なのかどうか分からず、事態が深刻になるまで放置し、被害児童が生命の危機的状況になって初めて児童虐待を通告していたことも示唆された。

本研究では岡山県と兵庫県の指導員の中から、過去1年間に児童虐待を受けた被害児童に関わったことが

ある22人を対象に、児童虐待に関する聞き取り調査を実施し、学童保育における児童虐待の早期発見徴候をより具体的に明らかにすることを目的とした。

II. 調査方法

本研究は、兵庫医療大学倫理審査委員会（第12042号）の承認を得て実施した。

1. 調査対象者

調査対象者は、本研究協力の同意が得られ、過去1年間に児童虐待を受けた被害児童と関わった経験を有する指導員（岡山県12人、兵庫県10人）計22人であった。このうち岡山県の指導員12人は、前述した調査の参加の有無に関係なく、今回新たに調査協力への依頼を行い同意を得た者であった。

Characteristics of the Behaviors of Child Abuse Victims and Their Parents Recognized
at the Time of Admission by School-age Child Care Workers

Emiko SUZUI, Masako SAITO, Yuka IIO, Yoshikazu NAKAYAMA, Kazutomo OHASHI

1) 兵庫医療大学看護学部看護学科（助産師/教育職）

2) 岡山大学キャリア開発センター（教員/教育職）

3) 大阪大学大学院医学系研究科（医師/教育職）

別刷請求先：鈴木江三子 兵庫医療大学看護学部看護学科 〒650-8530 兵庫県神戸市中央区港島1丁目3番6号

Tel/Fax : 078-304-3128

[2661]

受付 14. 8.18

採用 15. 2. 3

2. 調査内容

調査はインタビューガイドを用いた半構成的面接法による聞き取り調査を実施した。インタビューの内容は、被害児童の①家族構成と家庭環境, ②入所時の被害児童の言動とその他の特徴, ③送迎時の親の言動, ④指導員が児童虐待を疑い発見した時の状況と指導員の対応等, であった。会話は許可を得て全て録音し, 内容を逐語録にした。

3. データ収集方法

調査前に両県の特定非営利活動法人 日本放課後児童指導員協会事務局長と, 兵庫県学童保育連絡協議会事務局長からの研究協力の同意を得て, 同意書に事務局長の署名と押印を得た。次いで, 総会において, 研究協力者(同協議会事務局長)から指導員に対して協力依頼を行い, 同意の得られた指導員に対して, 調査当日に研究者本人により口頭と書面にて研究内容を説明し, 同意書に署名と押印を得た。

インタビューの実施は, 対象者のプライバシーの保護と会話の内容に関する守秘義務に努め, 取得した調査内容は, インターネットに接続していないパーソナルコンピューターを用いて逐語録に起こしデータ化して分析を行った。

4. 分析方法

分析は質的帰納的方法により行い, インタビューガイドに沿って分析基礎表を作成し, その中から, 被害児童の①家族構成と家庭環境, ②送迎時の親の言動, ③入所時の被害児童の言動とその他の特徴, ④指導員が児童虐待を疑った, または発見した時の状況と指導員の対応の部分抽出し, コード化した後に, 類似した意味を持つコードを集めカテゴリー化を行った。この過程で素データと分析基礎表を繰り返し読む作業を行った。

表1 対象者の属性

番号	性別	年齢(歳)	学童保育での勤務経験(年)	学童保育の収容人数(人) ¹⁾	結婚の有無 ²⁾	子どもの有無 ³⁾	取得資格の種類
1	女性	31	8	35	—	—	なし
2	女性	32	12	88	+	○	保育士, 教員免許
3	女性	41	20	42	+	○	放課後児童指導員資格
4	女性	44	12	130	+	○	保育士
5	女性	45	11	10	+	○	教員免許
6	女性	46	20	94	+	○	放課後児童指導員資格
7	女性	46	13	130	+	○	保育士
8	女性	47	12	30	+	○	放課後児童指導員資格
9	女性	48	12	152	+	○	放課後児童指導員資格
10	女性	48	20	135	+	○	保育士
11	女性	48	15	49	+	○	教員免許
12	女性	49	12	85	+	○	なし
13	女性	49	25	41	+	○	保育士
14	女性	50	4	9	+	○	保育士
15	女性	54	30	34	+	○	保育士, 教員免許
16	女性	55	12	31	+	○	保育士
17	女性	55	34	90	+	○	教員免許, 放課後児童指導員資格
18	女性	58	13	53	+	○	放課後児童指導員資格
19	女性	59	11	115	+	○	教員免許
20	男性	31	9	120	—	—	保育士, 教員免許
21	男性	37	22	39	+	○	教員免許
22	男性	56	12	40	+	○	なし

¹⁾調査時現在の, 調査対象者が勤務する学童保育における学童の収容人数を示す。

²⁾+は既婚, —は未婚を示す。

³⁾○は子どもを有する, —は子どもを有さないを示す。

Ⅲ. 結 果

聞き取り調査は岡山県と兵庫県の両県において実施し、インタビュー時間は合計16時間20分であり、一人当たり平均44分であった。

1. 調査対象者の属性 (表1)

調査対象者となった指導員は22人(女性19人, 男性3人)であり, 年齢は平均46歳(範囲31~59歳), 学童保育の経験年数は平均15年(範囲4~34年)であった。調査時の学童保育における収容人数は平均70人(範囲9~152人)であった。既婚20人と未婚2人, 子ども「あり」20人, 「なし」2人であった。有資格者19人, 無資格者3人であり, 資格の種類は保育士免許9人, 教員免許8人, 放課後指導員資格6人で複数の資格を有する指導員は4人であった。

2. 被害児童と加害者である親の特徴 (表2)

過去1年間に経験した児童虐待に関する事例は24件であり, このうち「1件のみ」は20人, 「2件」は2人であった。児童虐待24件の種類は, 心理的虐待14件, 身体的虐待12件, ネグレクト10件, 性的虐待1件, 代理ミュンヒハウゼン症候群1件であり, 虐待の種類が複合している事例は12件であった。

1) 被害児童の属性

児童虐待24件のうち, 被害児童と家族との続柄は「兄弟・姉妹がいる」15件, 「一人っ子」9件であった。被害児童の数は, 「一人っ子」9人, 「兄弟・姉妹の双方」12人, 「兄弟・姉妹のいずれか一人」9人の総勢30人であり, 女兒18人, 男児12人であった。

指導員が入所時の被害児童の行動に, なんらかの特徴があると認識していたのは24件中19件であり, 「不安, 緊張, 愛着障害等」8件, 「衝動性, 攻撃性」7件, 「自発性の欠如, 不活発, 抑うつ」2件, 「性的行動, 年齢不相応な姿勢」2件, 「自傷行為」1件, 「過度な自己主張」1件であった(重複あり)。他方, 入所時には「年齢相応な行動である」として問題がなかったと認識されていたのは5件であった。

2) 被害児童の家族構成と親との続柄

被害児童の家族構成は, 「核家族」18件, 「祖父母または親族が同居している家族」3件, 「母親または父親の恋人が同居している」3件であった。被害児童からみた親との続柄は「両親が存在する家庭」13件, 「一

人親の家庭」11件であった。両親が存在する家庭のうち, 被害児童がその両親の「実子である」10件, 「父親の実子で母親は継母」2件, 「母親の実子で父親は継父」1件であった。一人親の家庭では「母親のみ」9件, 「父親のみ」2件であり, 両親のそろっている家庭が一人親よりも若干多かった。

以上, 児童虐待は被害児童の性別, 家族構成, 親との続柄に関係なく発生していることがわかった。

3) 指導員が行った被害児童への対応

指導員が児童虐待を発見した際に行った対応は, 児童虐待の深刻度に応じて, 「児童相談所へ通告・相談」8件, 「児童相談所へ入所」4件, 「学校と連携」7件, 「指導員のみで対応」5件であった。児童虐待を疑ってから学校や児童相談所へ通告するまでの間, 指導員の対応として, (1) 被害児童への対応, (2) 他の入所児童への対応, (3) 親への対応と, 主に3者への対応をしていることも明らかになった。中でも被害児童への対応として, 子ども自身で入浴, 掃除, 洗濯ができるように関わり, 親からの暴力を受けた状況も子どもに考えさせて, その状況を繰り返さないように指導し, 暴力への対処方法も考えさせていたのが特徴的であった。

3. 具体的な入所時の被害児童の特徴 (表3)

入所時に指導員が認識した被害児童の行動特徴として, 1) 心身の不適応行動が内向きに現れるでは, (1) 内的行動と, 外向きに現れる (2) 外的行動, および他者との関係性でみられる (3) 愛着障害の3つに分類された。このうち (1) 内的行動では, 『不安・緊張』, 『自発性の欠如・不活発・抑うつ』が認められた。(2) 外的行動では, 『衝動性』, 『攻撃性』, 『性的行動』が認められた。(3) 愛着障害では, 『他の入所児童に対する過度な介入』, 『指導員に対する執着と拒否』が認められた。このほか, 2) 身体の清潔では, 洗顔, 洗髪ができていない等の『不衛生』, 3) 身体の状態では, あざや骨折等の『外傷』, 4) 食事のとり方では, おやつの食べ方が必死等の『食行動異常』, 5) 衣類では, 洗濯ができていなかったりサイズが合っていない等の『不適切な衣類』が認められた。また, 夜間の排泄行為をさせないために紙おむつを使用させている事例もあった。

以上, 指導員は, 入所した当初から, 多くの被害児童が前述した行動特徴を有していたと認識していた。また, これらの行動特徴は, 児童虐待の種類に応じて

表2 入所時の家族構成と被害児童の行動特徴および児童虐待の種類と指導員の対応

事例番号	父母の形態	親子の続柄	家族構成と人数		被害児童の状態			児童虐待の種類	指導員の対応
			被害児童と家族との続柄	人数(人)	現在の学年(年生)	入所時の被害児童の行動特徴			
1	両親	実子	両親, 子ども (姉, 妹)	4	1	衝動性, 攻撃性	心理的虐待, ネグレクト	学校と連携	
2			両親, 父親の恋人, 子ども (女兒)	4	1	衝動性, 攻撃性	心理的虐待	指導員で対応	
3			両親, 子ども (姉, 弟)	4	2	自傷行為	ネグレクト, 心理的虐待, 身体的虐待	学校と連携	
4			両親, 子ども (女兒)	3	2	車いすから降りると歩く 毎日元気に行動する	代理ミュンヒハウゼン症候群	児童相談所へ通告・相談	
5			両親, 子ども (兄, 弟)	4	2	不安, 緊張, 愛着障害	心理的虐待	学校と連携	
6			祖父母, 両親, 子ども (兄, 妹)	6	2	衝動性, 過度な自己主張, 性的行動	心理的虐待, 身体的虐待	児童相談所へ通告・相談	
7			両親, 子ども (男児)	3	3	不安, 多動	心理的虐待	学校と連携	
8			両親, 子ども (兄, 妹)	4	4, 3	年齢不相応な行動	ネグレクト	児童相談所へ入所	
9			両親, 子ども (兄, 妹)	4	2	年齢相応な行動	心理的虐待, 身体的虐待	児童相談所へ通告・相談	
10			両親, 子ども (姉, 弟)	4	2	指吸い等の不安行動	身体的虐待	指導員で対応	
11	継子	継子	両親 (父親は再婚, 父親の子ども), 子ども (姉, 弟)	4	2	不安, 愛着障害	心理的虐待, 身体的虐待	児童相談所に入所	
12			両親 (母親は再婚, 母親の子ども), 双子 (兄, 弟)	4	3	衝動性, 過激な攻撃性, 不安, 緊張	心理的虐待, 身体的虐待	指導員で対応	
13			両親 (父親は再婚, 父親の子ども) 子ども (女兒)	3	3	衝動性, 過激な攻撃性, 虚言壁	身体的虐待	児童相談所に入所	
14	一人親	母親	母親, 母親の恋人, 子ども (兄, 弟)	4	1	衝動性, 過激な攻撃性	心理的虐待, 身体的虐待	指導員で対応	
15			祖父母, 母親, 子ども (女兒), 母親の実兄の息子高校2年生	5	2	不安, 緊張, 性的行動, 年齢不相応な姿勢	ネグレクト, 性暴力	学校と連携	
16			母親, 子ども (姉, 妹)	3	2	情緒不安定, 愛着障害	ネグレクト	児童相談所へ通告・相談	
17			母親, 子ども (男児)	2	2	衝動性, 攻撃性, 愛着障害	ネグレクト, 身体的虐待	学校と連携	
18			母親, 子ども (女兒)	2	4	自発性の欠如, 不活発, 抑うつ	心理的虐待	児童相談所へ通告・相談	
19			母親, 子ども (兄, 妹)	3	5, 6	食べ物への異常な執着, 挙動不審, 不安	ネグレクト	児童相談所へ通告・相談	
20			母親, 母親の恋人, 子ども (姉, 妹)	3	6	食べ物への異常な執着, 挙動不審, 愛着障害	ネグレクト, 心理的虐待	学校と連携	
21			母親, 双子の子ども (兄, 妹), 祖母	4	2	年齢相応な行動	身体的虐待	指導員で対応	
22			母親, 子ども (兄, 妹)	3	3	年齢相応な行動	ネグレクト	児童相談所へ通告・相談	
23			父親	父親, 子ども (女兒)	2	5	自発性の欠如, 抑うつ	心理的虐待, 身体的虐待	児童相談所へ通告・相談
24	父親, 子ども (男児)	2	2	年齢相応な行動	ネグレクト, 心理的虐待, 身体的虐待	児童相談所へ入所			

父母の形態, 親子の続柄別に大別し, 事例は被害児童の学年の低い順に記載している。

表中の下線は被害児童を示す。

( ) 内は子どもの順位と家族の人数を示す。

表3 具体的な入所時の被害児童と親の特徴

I 被害児童の行動の特徴	1) 心身の行動特徴	(1) 内的行動	不安・緊張	笑わない	II 被害児童のその他の特徴	2) 身体の清潔	不衛生	洗顔ができていない
				目を合わさない				洗髪ができていない
				おどおどしている				散髪していない
				不安な表情				爪が伸び放題
				怒ると凄くおびえる				爪の中が真っ黒
	気分がむらがある・情緒不安定	垢で汚れている						
	常に緊張している	においがする						
	いつもびくびくしている	傷や殴られた跡がある						
	奇声を発する	アザがある						
	落ち着きがない	理由と合わない骨折がある						
(2) 外的行動	自発性の欠如・不活発・抑うつ	衝動性	じっとしている	III 保護者の行動特徴	送迎時の保護者の言動	不適切な衣類	不適切な養育態度	おやつのとりの方が必死
			自ら遊ぼうとしない					食べ方が卑しい
			感情表現が乏しい					いつも空腹を訴える
			物忘れが多い					衣類が洗濯できていない
			自傷行為					しわだらけになっている
すぐにカッとなる	服や靴に穴が開いている							
怒りっぽい	サイズに合わないものを着ている							
(3) 愛着障害	攻撃性	性的行動	些細なことですぐに喧嘩をする	送迎時の保護者の言動	不適切な養育態度	未熟な親性	すぐに子どもを殴る	
			他の子どもの首を絞める				拳で容赦なく頭部を強打する	
			容赦なく殴る・加減がない				子どもを殴る回数が多い	
			つねる・咬む・足で思いっきり蹴る				大声で子どもを怒鳴る	
			「死ね」、「消えろ」の暴言を吐く				子どもをいつもバカにする	
年齢不相応な姿態	殺す・捨てる子どもを脅す							
性器・自慰行為を見せる	罵詈雑言が多い							
他の児童に対する過度な介入	指導員に対する執着と否定	他の児童に対する過度な介入	友だちが求めていることをする	送迎時の保護者の言動	不適切な養育態度	未熟な親性	些細なことで怒る	
			自己主張ばかりする				暴力に対して抵抗がない	
			指導員の手や服を持って離さない				すぐに感情的になる	
			怒られると凄くシケンとする				子どもに対して威圧的	
			急に抱きついたり、避けたりする					
極端な行動をとる								
褒められるのが苦手								
甘えるのが下手								

系統的に現れるのではなく、虐待の種類にかかわらず、被害児童の特徴的言動として現れていた。他方、入所時には年齢相応な行動であり問題がないとされていた被害児童が、前述した特徴を示すことで、指導員は児童虐待を疑い、発見につなげていたこともわかった。

4. 入所時にみられた親の行動特徴

被害児童だけではなく、加害者である親にも、他の親とは異なる行動特徴が認められた。その行動特徴は、送迎時にみられる不適切な養育態度であり、被害児童の些細な行動に対して、頻発する『暴力』、『暴言・恫喝』、『未熟な親性』であった。中でも、『暴言』は、「こいつの頭は空っぽですから」等と子どもの自尊心を傷つける言葉が日常的に使用され、『恫喝』は、「殺すぞ」

等と子どもの恐怖心や不安を煽るものであった。

以上、指導員は加害者である親の言動についても他の親とは違うという認識をしていた。しかし、指導員はこれらの行動特徴を入所時に認識していても、それが児童虐待とはすぐには関連付けて考えることができず、児童虐待がより深刻化するまで様子を見ていたことも明らかになった。

IV. 考察

児童虐待を発見した指導員は、被害児童が学童保育に入所した時点から他の子どもとは違う行動特徴を認識していた。また、それは児童虐待の種類によって系統的な傾向を示すものではなく、こういった種類の虐待であっても被害児童特有の行動特徴を示すことも認

識していた。つまり、入所前から親からの直接的な暴力・暴言以外に、養育放棄等子どもへの配慮を欠くことは、子どもの基本的欲求が満たされないだけでなく、親からの関心や愛情も伝わっていない。そのことが子どもの存在感に対する不安を煽り、常に不安定な存在としての緊張を強いる生活環境へと追い込んでいくためであると考えられる。

その結果、八木の分類³⁾にもあるように、児童虐待を受けた被害児童は内的行動と外的行動に分かれた行動特徴を示し、前者は被害児童自身で感情を抑圧し、外界からの刺激に対する反応を鈍化させる。また、自傷行為を行うことで、抑圧された怒りのエネルギーを解消させる。他方、後者は、行き場のない怒りやストレスを周囲の第三者にぶつけることで、不満のエネルギーを解消していたと考えられる。さらに、親子の人間関係構築の未熟さが愛着障害となって現れ⁴⁾、他の児童への暴力・暴言、または指導員への執着と拒否というアンビバレントな感情と行動を起こしていたと考えられる。

また、指導員は加害者である親にも不適切な養育態度がみられると認識していた。それらは、毎回の送迎時にみられる被害児童に対する暴力、暴言・恫喝、未熟な親性の行動であり、些細な子どもの言動に対して繰り返されるものであった。この不適切な養育態度に対して、指導員は「虐待をしている親」という認識は乏しく、「変わった親」という印象を持っていた。そして、この不適切な養育態度をする親は父母の形態、親子の続柄、家族構成と人数等に関係がなく、どういった家庭環境であっても存在していた。

他方、入所時には問題がないとされていた親が、入所後児童虐待を起こすのは、離婚、離職等、家庭状況の経済的変化が起因していた。加えて、再婚後、新しい家族が増えることで家族内の人間関係が変化し、前夫(妻)の子どもが受容できず暴力につながっている場合もあり、家庭環境の変化は親のストレスも高まりやすいことから、児童虐待が発生しやすい状況であることが再確認できた。さらに、こうした親は指導員との会話も乏しい傾向にあることから、他者からの介入を困難なものにしていることもうかがえた⁵⁾。そのため、家族が変化した時期には親への支援も必要であると考えられる。

しかし、現実にはその対応は決して早いものではなく、指導員の児童虐待に関する知識が不十分であるこ

とと同時に、通告したことで指導員がその責任を問われることへの不安が対応を遅れさせていた。先行研究で報告されていたように、被害児童の身体に明確な虐待の証拠が確認できるまでは児童虐待とは断言できず、「通告が誤報であった場合、通報者を守る法的な配慮は未だ不十分なままである」⁶⁾ことが通報を遅らせる一因であった。そのため、見えにくい心理的暴力、ネグレクト、性的暴力に関する発見は、より一層対応が遅れることになっていた⁷⁾。

このほか、親によっては常軌を逸する程の厳しい躰をしても、親自身はそれが暴力だとは全く認識できておらず、被害児童の命が危険にさらされることで初めて虐待に気づく場合もあった。この場合、その厳しい躰は、親自身の成育歴が影響していた。

すなわち、学童保育は児童虐待の早期発見を果たす施設として重要度が増すと期待されてきた⁸⁾。こうした活動を推進させるには、指導員を対象にした児童虐待研修の充実に加えて、学校等の関係機関との連携等が重要であると考えられる。また、指導員には通告する義務があることも周知していく必要がある。

以上の結果より、児童虐待が今も増加する現在において、子どもの身近な存在である学童保育は、家庭の変化に伴う⁹⁾児童虐待も早期に発見することが可能であり、地域の中で子どもを見守る施設としては重要な役割があると考えられる²⁾。そして、今後、地域に存在する医療機関や看護職との連携¹⁰⁾を図ることにより、より一層適切な対応が提供できると考える。

V. おわりに

指導員は、被害児童のほとんどが学童保育に入所した当初から、他の子どもとは異なる心身の行動や身体の状態、清潔、身体の状態、食事のとり方、衣類の状態等の特徴を認識していた。また、加害者である親に対しても、他の保護者とは異なり、送迎時には不適切な養育態度を表していたと認識していた。しかし、それらが児童虐待であるという考えには至らず、状況がより深刻化することで初めて児童虐待として認識し対応していた。

指導員は子どもたちが入所した時点で、被害児童と親との行動特徴を認識し、被害児童であることを疑う場合には、速やかに関係各所と連携をとり、相談をしながら対応していくことが、児童虐待の早期発見と早期対応につながると考える。

本研究は、平成25年度から平成27年度までの科学研究費助成事業基盤研究C(25463534)により行った研究の一部である。

利益相反に関する開示事項はありません。

文 献

- 1) 鈴木江三子, 谷野宏美, 斎藤雅子, 他. 学童保育指導員による児童虐待の発見に関する実態調査. 小児保健研究 2012; 71 (5): 748-755.
- 2) 谷野宏美, 鈴木江三子, 久我原朋子, 他. 学童保育指導員による性暴力と虐待の発見要因—学童保育指導員へのインタビュー調査を基に—. 小児保健研究 2012; 71 (1): 52-59.
- 3) 八木修司, 藤原慶二, 中村有生. 情緒障害児短期治療施設に入所する被害児童の行動特徴について. 関西福祉大学社会福祉学部研究紀要 2009; 12: 267-276.
- 4) 楠 凡之. 気になる子ども気になる保護者—理解と援助のために—. かもがわ出版, 2009: 56-62.
- 5) 辻佐恵子, 鈴木敦子. 子ども虐待のケアにおいて小児看護師が感じる困難さの内容とその要因. 四日市看護医療大学紀要 2010; 3 (1): 43-51.
- 6) 後藤 恵. 児童虐待と暴力: 被虐待児のための機関連携と地域におけるネットワークの構築. 病院・地域精神医学 2005; 47 (4): 44-46.
- 7) 鈴木江三子, 斎藤雅子, 飯尾祐加, 他. 学童保育指導員が認識する虐待徴候. 母性衛生 2013; 54 (1): 51-60.
- 8) 福田智雄. 学童保育クラブにおける子ども虐待対応の実態等に関する調査研究 (1). 国際学院埼玉短期大学研究紀要 2007; 28: 29-32.
- 9) 谷村雅子. 小児保健の現状と課題, 提言—虐待防止からみて—. 小児保健研究 2011; 70 (記念号): 15-16.

- 10) 植木野裕美, 鎌田佳奈美, 鈴木敦子. 看護職の連携による子ども虐待への予防・早期発見・対応 産科病棟・NIUC からみた連携状況. 滋賀医科大学看護学ジャーナル 2001; 5 (1): 127-131.

[Summary]

The present study aimed to determine signs for the early identification of child abuse. Twenty-two dedicated, full-time school-age child care center workers (care workers) in Okayama and Hyogo Prefectures who have recognized child abuse victims during the past years and consented to participate in the study were interviewed.

As the results that the care workers had already recognized that: (1) the behaviors (physical and psychological behaviors), (2) maintaining physical hygiene, (3) health, (4) dietary habits, and (5) the condition of clothes of child abuse victims were different from those of other children. In the case of abuse directed at children, the signs of abuse can often be identified at the time of admission to the care center.

The behaviors and remarks of parents as child abusers differed from those of other parents even at the time of the admission of their children. Their inappropriate child-raising behaviors were characterized by (1) violence, (2) verbal abuse and (3) immature paternity or maternity. It is important to observe the characteristics of the behaviors of children at the time of admission and their parents to identify child abuse as early as possible.

[Key words]

school-age child care center,
school-age child care workers, child abuse,
early detection, victimized children